

## 力女と女傑伝説あれこれ

● 金 成 陽 一

### はじめに

「平家物語」木曾の最後の章には、「木曾殿は信濃から巴、山吹という二人の美女を都まで連れてきており、巴は色白く髪長く、容貌がまことに美しい屈強の荒馬乗りで、どんな難所でも乗り下し、弓矢打物取っては、いかなる鬼神にも立ち向かおうという一騎当千の勇婦であった」とある。

その彼女が、義仲が都落ちする最後の七騎の中に残っていたのであった。しかし義仲は「自分はここで討死するか自害する覚悟だ。最後まで女を連れていたとあっては末代までの恥」と、彼女を立ち去らせてしまう。その時、ちょうどそこに現れた敵に、最後の戦と立ち向かっていく巴の描写は凄まじい。やって来たのは三十騎ばかりを連れていた武蔵の国の御田八郎師重という太刀の剛の者であった。

巴はたちまち、その中へ割って入り、御田八郎におしならべ、むんずと組んで引き落とし、自分の乗っている鞍の前輪に押しつけて、びくとも動かさず、首をねじ切って捨てた。そのあとで、巴は鎧を脱ぎ捨てて、東国のほうへ落ちて行った。(中山義秀訳「平家物語」河出書房新社。昭和42年)

巴がいかに勇婦であっても、この場面俄かには信じ難い。若い男女の体格、力の差は歴然だし、まして相手も太刀の剛の者とあれば、そう簡単に決着がつく訳もないだろう。

昔、妹が高校時代のスキー合宿での話。四、五人の女生徒たちが悪戯半分に若い男性の体育教師を脅かしてやろうと後ろから雪の中へ押し倒そうとしたら、逆に全員があつという間に放り投げられてしまったそうだ。妹も驚いていたけれど、男と女の力の差はこれほど大きいということだ。

巴と御田八郎の戦いも、巴が馬ごと御田の横（あるいは後ろ）から体当りをしたはずみで、御田が落馬してしまったというのが案外本当のところなのではあるまいか。いつだって人々に好まれるのは「美しい人」や「優秀な人」である。誰だって醜いよりは美しい方がいいし、馬鹿よりは利口がいいに決まっている。我々が好むのは、「○○さんは女優にスカウトされた」とか「○○君は大学を一番の成績で卒業した」というとても分かり易く、耳に心地よい響きなのである。

### 「今昔物語集」より

力の強い女の話で良く知られているのは、今昔物語集卷二十三「相撲人大井光遠妹強力話第二十四」<sup>(1)</sup>であろう。甲斐国の相撲大井光遠の妹が、人に追われて逃げてきた男に刀を突き付けられて人質にとられてしまった。妹は「年二十七八許ニテ、形千有様美麗ナル女」であったという。しかし彼女が右手で男が刀を突き付けた手をやんわりつかむようにし、左手で前に散らばっていた篠竹の矢柄を押し砕いていたのを見た男は、肝を潰して逃げ出してしまった。その後、捕まえ

られた男は光遠に、妹は鹿の角をも朽木のように砕いたという怪力だと聞かされて、更に驚いたという話。美女と怪力という余りにも一致しないイメージの組み合わせが愉快である。

今昔物語集巻二十三にはこれ以外にも力女の話が沢山載っていて面白いのだが、そのいくつかは「日本霊異記」から取り入れられているようだ。「尾張国女取返細畳語第十八」もやはり剛力な女の痛快な物語である。そして彼女も「其女形千柔にゆうなん栗ナル事練糸いとよヲ繚ルガ如シ」(姿つきがなよやかで、まるで絹糸をより合わせた様)であった。

彼女が織った麻布の素晴らしい着物を着ていた夫が、それを国司に取り上げられてしまった。話を聞いた妻は一人で国府へ行くと、二本の指で国司をつまみ上げ着物の返却を求めたのである。震え上がった国司がすぐにそれを返したのは当然であった。しかし後日譚として、彼女は国司の仕返しを恐れた夫の両親によって離縁させられたというから、少しばかり理不尽な話ではあるのだ。彼女はこんな自己中心的で小心者の夫たちと一緒にいるよりは、他でもっとまともな男を捜した方がずっと幸せになれただろう。

話は更に続いて行く。故郷に帰った元妻が川の船着き場で洗濯をしていた時、船に草を積んできた船主の男が彼女を盛んにからかったのだ。女が言い返すと、男は船を止め彼女を殴りつけたのである。女は平然として手で船の片方を叩き、船は舳の方から水中に没した。

「わたしに無礼を働いたから船を陸に引きあげてやる。何ゆえみんなでわたしをいじめ馬鹿にするのか」と(女は)言って、荷を載せた船を一町(約109m)ほど陸に引っ張り上げた。これを見て船主の男は女に向かってひざまずき「本当に悪いことをいたしました。ごもっともです」とあやまったので、女は許してやった。その後、この女の力がどれぐらいかためしてみようと、その船を五百人で引かせたが、びくともしない。これでわかった。この女の力は五百人の力にまさっていたのだ<sup>(2)</sup>。

これもまた痛快な力女伝説である。彼女が美人だったが故に、ことさら男たちにちょっかいを出されたのかもしれない。それは、可愛い女の子に意地悪をする男の子の心理に、少し似ているような気もする。

盗人の話が多い巻二十九の中でも、特にその第三「不被知人女盗人語」(人に知られぬ女盗人の語)は不思議な話である。

三十歳ぐらいの侍がある夕暮れ時、二十代の美しい女の家を招き入れられ、誘われるまま彼女と共寝したのを切掛けにして、盗人になることを頼まれる。二十日余り女との生活が続いた後、女は、京の大きな家に押し入るので二、三十人の仲間のいるところへ行くように男に言う。彼が指図された仲間たちのところへ行ってみると色白の小男がいて、皆彼に服従している様子だった。盗みが成功して男が戻ると、女は食事の支度をして待っており、彼は既にこの仕事を嫌だとは思わなくなった。女を愛してもいたのである。いつも仕事はうまくいき、いつの間にか二人の生活も一、二年が過ぎた。

そんなある日、「はかない世の中では、心ならずもお別れすることがあるかと思うと悲しくて仕方がありません」と女は泣いた。しかし、そんなことをあまり気にも留めなかった男が外出から戻ると、家は跡形もなくなっていたのである。彼はびっくりしたけれど、どうしようもなかった。

その後、男は一人で盗みを働いて捕えられ、この出来事を白状したのである。

「これはじつに驚くべきことである。あの女は妖怪変化などだったのだろうか。一日二日のう

ちに、家も蔵も跡形なく壊し、消滅させてしまったとはなんとも不思議なことだ」

男は、皆が怖れ敬うようにしていた色白の小男のことを思い出した。松明の火影にすかしてみたら小男の顔は、たいそう白く美しく、その目鼻立ちや面ざしが自分の妻にそっくりだなあと見えたのである。

まさに千夜一夜物語を彷彿とさせる奇妙な物語である。謎が大きければ大きいほど、ますます関心も魅力も大きくなっていくものなのだろう。

### 「ギリシャ神話」より

さて、いくつか他の国の力女たちのエピソードを搜してみよう。

「ギリシャ神話」にも男勝りの活躍をする多くの女性たちが登場する。神々の中の神ゼウスですら正妻ヘラが怒り出したなら、もうお手上げ状態なのである。ゼウスの頭から完全武装をした成人の姿で出てきた娘である軍神アテナは、もう一人の軍神アレスとは兄妹の関係にあるのだが、彼が戦闘の狂暴な面を表すのに対して、アテナは知的な戦術を表すから、彼女は力女というよりは美と技の女神であろう。トロイア戦争に加わることをゼウスに禁じられたアレスが尚戦場に出ようとした時、彼女は押しとどめ、アレスはアテナの胸の楯を狙って槍を放ったのだ。しかし彼女は無傷で、アレスは逆にアテナに石で打たれている。

男勝りの女というならむしろ、男子を望んでいた父親に生まれてすぐに捨てられて、牝熊に育てられたアタランテの方が相応しい。成人した彼女は狩猟を好み、結婚にも女性的たしなみにもまるで関心を示さなかった。アルゴナウテス（アルゴ―船の勇士たち）が無事に戻って、ペリアス王が死んだ時、葬礼競技に参加したアタランテは、レスリングでペレウスに勝利している。それはペリアス王の息子アカストスが父のために催した格闘技大会であった。

だが、アタランテの名が知られているのは、カリュドンの猪狩りや彼女の求婚者たちを競技で負かした神話の方だろう。彼女はカリュドンで猪を仕留めた後、そこから遠くない父王の国へ帰って行ったのだが、父は彼女に是非とも結婚するよう勧めたのである。後継ぎの息子がいない王には、娘が結婚相手と一緒に自分の国を治めてほしいという願望があったのだ。無下に父の言いつけを断れなかったアタランテが出した条件は、「自分と競争して勝った男と結婚するが、負けた者はその場で殺す」というものであった。

アタランテの美しさにひかれた多くの青年たちが競争に挑んだ。アタランテは衣服を身につけ、あるいは武装し、若者は裸で走ったが、みな彼女に負けて殺された<sup>(3)</sup>。

ところがメラニオンという青年はアプロディテに助けを求め、途中アタランテに追いつかれそうになると、女神からもらった黄金のりんご三個を後ろに投げながら走ったのだ。

アタランテは好奇心からか、あるいは黄金のりんごが欲しかったためか、あるいは青年を勝たせたかったためか、りんごを一つずつ拾っていて、そのあいだに競技に負けた<sup>(4)</sup>。

自分と競争や力較べをして勝った男と結婚しようとするお姫様の話は、多くの昔話に登場してくる。「ニーベルングンの歌」前篇のイースラントの女王プリュンヒルトなど、まさに典型的なこのタイプの女傑である。

もう一つ忘れてならないのは、女ばかりからなるアマゾン部族であろう。弓を引き易いように娘たちの右の乳房を切り取って、後を焼いたことからギリシャ人は「乳なし」との意で、勇猛な彼女たちをアマゾンと呼んだのである。彼女たちは他民族の男と契ると、女だけを引取り男子は父に返したという。南米のアマゾン川は、その流域に女だけの部族がいるとの伝承から名づけられたようだ。

アマゾンたちはギリシャの名だたる英雄たちとも繰り返し戦っている。良く知られているのは、ヘラクレスの第九の難業「アマゾンの女王ヒッポリュテの帯」であろう。アルゴリスの王エウリュステスの娘アドメテがアマゾンたちの女王ヒッポリュテが持っていた帯を欲しがったため、ヘラクレスは小アジアの北岸テルモドン河畔へと出かけて行ったのである。この時、友人であるテセウスも同行していた。元々、この帯は、ヒッポリュテが父アレス神から一族の支配者のしるしとして受領したものであった。

ヘラクレスがそれを譲ってほしいと申し出ると、女王は好意を示し、意外にあっさり譲り渡す約束をしてくれた。しかし英雄がそんなにも簡単に成功することを怒ったヘラは、アマゾン族の女に扮して彼女らの先頭に立ち、女王が連れ去られたと言ってヘラクレス軍を襲った。女王のヒッポリュテが約束を破ったと思ったヘラクレスは女王を殺し、帯を奪い取って出帆した<sup>(5)</sup>。

ゼウスの妻ヘラにはヘラクレスを産んだ母親に対する激しい嫉妬があって、執拗に英雄を迫害するのだが、これもその悲しい物語の一つである。

一方、英雄テセウスは、アマゾン族の指導者の一人である女王ヒッポリュテの姉妹アンティオペを捕えている。二人が恋に落ちたという話と、アマゾン族がテセウスに友情のしるしに贈物をした時、彼が自分の船に乗るように誘い、そのまま彼女を乗せて出航したという話がある。

彼女を失ったことに腹を立てたアマゾン族は、アッティカまでテセウスの跡を追った。彼の王国に侵入し、都アテナを攻撃して彼女らはプニクス丘を占領し、アクロポリス丘を包囲した。そして二つの丘の狭間で激戦がくり広げられたが、テセウスが勝利を収めた<sup>(6)</sup>。

トロイア戦争でアマゾンたちがトロイア方に味方したのは、女王ペンテシレイアが過って姉妹のピッポリュテを殺してしまった罪を、トロイアのプリアモス王によって浄められたためである。戦争中アマゾンたちは多くのギリシャ人を殺した。フィレンツェ考古美術館で見ることができる、二人のアマゾンに討たれるギリシャ戦士の壁画は、紀元前四世紀にタルキニアでみつかったものである。ペンテシレイアは結局アキレウスに殺された。

その刹那にアキレウスは彼女の勇ましき健気さに併せて、今までは気のつかなかったその美にうたれる。劇しい憐れみと愛着と、後悔と自己憎悪とに虐まれて、アキレウスは自分の手がなし終えたことに呆然と立ちつくすのである。しかし彼がそれからできたのは、その屍を潔めて、進んでトロイア軍に返して渡し、懇ろに葬らせることだけであった<sup>(7)</sup>。

と、まあ、これはあまりに美化されたアキレウスの態度で、「平家物語」の熊谷次郎直実が一の谷で泣く泣く首を掻き切った敦盛の首と形見を父経盛に届けたのにも似ているけれど、恐らくそのようなことはなかったのではないか。(それよりは、アキレウスが彼女を死姦したとか、あ

るいは目を抉って川に投げ込んだという伝説の方が尤もらしく響く)。

### 「千夜一夜物語」より

「オマル王とふたりの息子の物語」は、「千夜一夜物語」の中で第44夜から145夜に及ぶ最も長い騎士道物語である。前半に登場してくるロウム国王の娘アプリザー姫は、バグダッドの王子シャルルカンをいとも簡単に放り投げている。シャルルカン<sup>モ</sup>は力の強い巨人のような国王オマル・ビン・アル・ヌウマンの息子で、父に似て猛者を打ち負かし敵をさんざん打ち滅ぼして、不世出の勇者とうたわれていた若者なのだ。物語はアプリザー姫について、「満月のような女」、「毛髪を輪にし、額はつやつやと白く輝き、瞳は驚くばかりに大きく、黒く生き生きと輝いて、こめかみの巻毛は蠍の尾にまごうばかり」の絶世の美人と述べる。

森で道に迷ったシャルルカンは、偶然にもこの姫と取っ組み合いをすることになったのだ。まず、「もしお前が私を投げとばしたら、分捕りものにしてもよい。しかし私がお前を投げとばしたら、私の言いつけ通りにならなきゃいけない」と条件を出したのはアプリザー姫の方であった。自分が戦士の中の戦士であるのを彼女は知らないのだと思ったシャルルカンが、すぐに彼女の言ったことを了承したのは当然であった。しかし、二人ががっちり取っ組みもみ合った後、両手を彼女の細腰に回した彼は、腰の柔肌<sup>も</sup>に思わず悩ましさを覚え、身体が震え出してしまったのだ。

「このときとばかり、乙女は相手を宙に持ちあげると、どうとばかり地上に投げて、その胸の上に砂山のような尻を」据え、シャルルカンは「お前が美しいから負けたんだ。だからもういっぺん勝負をさせてくれ」と頼む始末。だが、二度めも同じような展開で、互いに相手に近づき胸と胸とを合わせ腰が触れ合ったかと思うと、シャルルカンはまたも力が抜けてしまう。

女はそれに気がつく<sup>も</sup>と、電光石火の早業で相手をもろ手で差し上げ、大地に投げ出しました。シャルルカンはあおむけにひっくりかえりました<sup>(8)</sup>。

という次第であった。「千夜一夜物語」にはこうした男勝りの逞しい女たちが数多く登場してくる。また、金持ちや身分の高い男たちが美女を囲って常に厳重に監視していても、いとも簡単に裏切られてしまうといった話も多い。

しかし、アプリザー姫は、彼女の美しさに欲情したシャルルカンの父王によって麻薬入りの酒を飲まされ、犯されてしまったのだ。そして妊娠した彼女は陣痛に苦しんでいた時、黒人奴隷に殺されてしまうのだから、女傑とはいえ、受身である女の性は如何ともしがたいものである。

私がすぐに思い出すのは平安時代の王朝物語「とりかへばや」である。

どちらも美貌の姉弟である腹違いの姫君と若君はその性格がまるで正反対で、肉体上の性別と自分が認識している性が違っている今でいうところの transgender、つまり性同一障害で、肉体上の性と自分が認識している性が違っていたのである。今でこそ人々の理解はある程度進んでいるけれど、一昔前まではこうしたことを公にすることなどとても考えられなかった。ましてや平安の貴族社会では尚更のことであっただろう。鎌倉時代に書かれた「無名草紙」には次のように記されている。

「とりかへばや」こそは、続きもわろく、もの恐ろしく、おびただしき気したるもの<sup>も</sup>のさま、なかなか、いとめづらしくこそ思ひ寄りためれ。思はずに、あはれなることどもぞあんめる。(三

姫君は子供の頃から、男の子のように蹴鞠などで遊び、若君は内気で人の顔もまともに見られない有様だった。二人は女君が男装して出仕、男君は美しい姫君という噂のまま成人し、しかも女君は本性を隠したまま、あろうことか右大臣の娘と結婚までしてしまう。これで何の問題も起こらない方が不思議というものだ。果たして、男装の女君は好色な宰相中將に付きまといわれた揚句、その秘密を見破られ妊娠させられてしまう。このあたり、強気で通してきた人間の中にあきらめに似た気持ちが漂っている。しかし、物語は最後に瓜二つの姉弟が人知れず相手の立場にうまく入れ替わって、大団円を迎えることになるのだ。

同じ平安時代の似たような物語として、鎌倉初期の「有明のわかれ」があるのを付記しておく。「有明の別れ」— ある男装の姫君の物語。1979。創英社。日本古典新書)

日本では2004年に性同一障害特例法が施行されてはいるものの、残念ながら実際にはまだまだ根深い偏見が残っているのではないか。平安時代のこの姉弟が現代に蘇ったとして、果たしてどのぐらいの幸せな人生を送ることができるであろうか。

敬虔なキリスト教徒であったフランク王国の王ハインリッヒ一世(876～936)は、それまでヨーロッパに伝わっていた英雄叙事詩や騎士物語を悉く焚書にしてしまった。キリスト教を心底から信奉する人間にとって、そのような荒々しく場合によって残酷な物語など信仰の邪魔にこそなれ、プラスに作用することはないと考えたのである。ましてや逞しい女傑の活躍などとんでもない話であっただろう。かくしてヨーロッパ大陸からそうした話は一切消えてしまったのである。

ただ、ここに極北のスκανジナビア諸国、分けても絶海の孤島アイスランドが、夥しい神話や信仰の記録を残すことになった。アイスランドは、その特殊の地理的位置と、古代ゲルマンの遺風を慕う民の心情に加えて、スノリ・ストルルソン(1178～1241)のような気骨ある大学者をもったことで、目ざましい異教徒的文芸復興を経験したからだ。八～九世紀から十二世紀頃までに作られた、古代ゲルマン族の神話や伝説に取材した叙事詩を集めた「詩のエッタ」、上記スノリが北欧神話の概要を散文で記した「散文のエッタ」、サガと呼ばれる散文で書かれた夥しい歴史や物語が、この極北の孤島で十二、三世紀に書きとめられ、それが近代になって続々と発見されたのは、まさしく世界文学史上の一奇蹟として世界の眼をそばだたしめたものだった<sup>9)</sup>。

英雄や逞しい女傑が活躍する物語などつくに忘れ去られていたヨーロッパの人々にとって、「千夜一夜物語」の生き生きとした女性像は大きなカルチャーショックだったのではないだろうか。

### 「ゲルマン神話」より

ゲルマン神話で主神オーディン(ヴォータン)に仕える戦いの女神九人のワルキューレについても触れておこう。彼女たちは白鳥の姿をして空を飛んでいるとも、駿馬に乗って空を駆けているとも言われていた。リヒャルト・ワグナーの「ワルキューレの騎行」は、彼女たちが馬に跨って空中を駆け巡る様を描いているのだが、この曲は1979年に上映されたF. コッポラ監督の映画「地獄の黙示録」の中で米軍のヘリコプター部隊がベトナムの村を襲撃するシーンのバックに流されて、更に知られることとなった。何機ものヘリコプターが我が物顔で空を飛び、機銃掃射す

る場面はぴったり音楽にマッチしていた。

ゲルマンの勇士たちは戦死すると、美しいワルキューレたちによって天上のワルハラに運ばれて、毎日うまい酒を飲み、御馳走を食べ、世界の最後の日がかかるまで体を鍛えながら楽しい日々を過ごすのである。酒と御馳走と美女というこのあたりは、完璧な男目線となっている。(これは聖戦によって死んだ兵士たちが、瞳の大きな美女たちと共に楽しい日々を過ごすというイスラムの天国にも似ている)。

ゲルマン神話一の美女といわれるフレイアは美と愛の神、また子宝や畑の実りを恵む神である。金曜日を表す英語の Friday は彼女に捧げられた日だし、ドイツ語の「婦人」を表す Frau もルーツを辿ればフレイアに行きつく。この美神はしかし勇ましいことも好きだったようで、名誉の戦死者があると鷹の羽衣をつけ、ワルキューレたちを率いて戦場に駆けつけて、オーディン（ヴォータン）がワルハラの間際に迎え入れる死者たちの半分を自分の館に運んで行ったという。昔のゲルマンの女たちは恋人や夫が戦死すると、自分も駆けつけてフレイアの館に一緒に迎え入れられるべく、進んで命を落としたりしたのである。

ワグナー作「ニーベルンゲンの指環」四部作の第二番目「ワルキューレ」では、ワルキューレの一人ブリュンヒルデが父ヴォータンの言いつけを破ったがために、燃えさかる炎の輪の中で深く長い眠りに閉じ込められる。いつの日にか、恐れを知らぬ男が炎の輪を越えて彼女を目覚めさせるまで、眠りつづけることになったのだが、その男こそブリュンヒルデが助けた女性ジークリンデから生まれたジークフリートなのであった。このモチーフは、「眠りの森の美女」の中で百年の眠りから姫を目覚めさせる王子の姿に繋がっている。

この作品ではブリュンヒルデの勇姿が語られてはいても戦う描写はなく、彼女が「甲冑姿に槍をたずさえたヴォータンと同じいでたちに身を固めていた<sup>(10)</sup>」と述べられているにすぎない。また、ヴォータンの妻フリッカも「二頭の雄羊に引かせた戦車」に乗って、なかなか勇ましいのである。

命令に背いたブリュンヒルデを許してくれるようにと父ヴォータンに懇願する八人のワルキューレたちに、父は激怒して言う。

女々しい意気地なしたちめ！

そんなめそめそ声を教えこんだおぼえはないぞ。

戦場で勇敢に戦う体と、厳しく強い心、

わしがおまえたちに鍛えこんだのは、その二つだ。

謀反者に罰をくだそうとするわしに向かって、

めそめそと涙声をあげるとはなにごとだ？<sup>(11)</sup>

神話時代のゲルマン女性はかように逞しかったのである。

既婚の身分高き貴婦人に対する憧れや恋心を歌うトルバドゥール（元々は「作詞作曲する人」の意。troubadour）の詩が南フランスに流行し出すのは十二世紀のことである。それまでヨーロッパの男たちにとって女とは遊び道具であり、男に可愛がられる女が最高なのであった。しかしトルバドゥールの詩は女性を非常に高い存在に押し上げて崇め、それまでの考え方とはまるで違うものであった。これは十一世紀から修道士や聖職者たちの間でマリア崇拜が起り始めたこととも関連しているのかもしれない。マリアに捧げられる祈祷書が盛んに編まれ出すのも

この頃からである。それまでの恋愛観念を覆すような、高貴なる婦人への恋が（観念的にも）急速に広まって行ったのは、偏にトルバドゥールの影響であった。身分高き成熟した女性といえ人妻に違はなく、騎士がそうした叶えられぬ禁断の恋に激しく身を焼いていく愛の観念とは自虐的のしか言いようがない。女の美德とは、貞淑で素直に男に従うことであり、男勝りの女、ましてや女傑や力女などともないという時代になっていたのである。

ヨーロッパ中世世界でそうした逞しい女はすぐに魔女と見なされ、さっさと火あぶりにされてしまったに違いない。歴史的に見ても女戦士としては、十五世紀前半に救国の神託を受けたと信じてイギリス軍を破り、オルレアンを救った若きジャンヌ・ダルクぐらいしか思い浮かばない。彼女は異端として火刑に処され、カトリック教会によって聖女と承認されたのはやっと1910年になってからのことである。

### 「ニーベルンゲンの歌」より

前に触れたプリュンヒルデは、中世叙事詩「ニーベルンゲンの歌」ではどのように描かれているだろうか。前篇に登場してくる彼女は「肩をならべるものも絶えてないほどのすぐれた乙女で、美しさも限りなく膂力もまた素晴らしい」イースラントの女王であった。テキストは彼女が「勇壮なる武人を相手とし、愛を賭けて槍投げの技を競った」と述べた後、更に続ける。

また遠くへ石を投げ、更にそのあとを追って幅跳びをした。

彼女の愛を得んとするものは、以上三種の競技において、

確実にこの位たかき女王から勝たねばならなかった。

その一種目たりと敗をとれば、彼は首を失うこととなるのだ<sup>(12)</sup>。

競技を行って勝った者と結婚するが、負けた者は首を斬られるというプリュンヒルトの結婚の条件は、まさにギリシャ神話のアタランテと同じである。彼女たちは「自分を愛するなら命を賭けろ。さもなくば死ね」、中途半端な気持など絶対に許さないとやっているのだ。1200年頃に成立したこの物語は、イースラント（アイスランド）という背景を考えても、キリスト教よりゲルマン神話の影響が大きく、力女や女傑たちはまだ生き生きと活躍していた。

彼女に惚れ込んだグンテル王を、ジークフリートが助太刀する場面を読んでみよう。ジークフリートはグンテル王の妹と結婚したいがために、はるばるイースラントまで彼に同行して来たのである。プリュンヒルトが槍投げの後に投げるといふ重い石を、十二人の剛勇な武士がようやく運んで来て試合が始まった。隠れ蓑で透明人間となったジークフリートはグンテルの代わりに楯を持って、プリュンヒルトが投げた強力な槍から王を守ったのである。

この投槍の威力には、強い勇士が二人ともよろめいた。

もし隠れ蓑がなかったら、二人はその場に倒れ死んだであろう。

素早く立ち直ったジークフリートは、女王の槍を彼女に向かって投げ返したのだ。彼女を射殺さぬために穂先を逆にして。

女王の勇力をもってしても、この槍の力は支えられなかった。

グンテル王では、こうはいかなかったであろう。



美しいプリュンヒルトはどんなに素早く起き上がったか、  
「気高い騎士グンテル様、投槍の技、天晴と存じます。」  
彼女はこれがグンテルの力であると思っていた<sup>(13)</sup>。

次に、美しい姫は石を高々と持ち上げて力の限り遠くへ投げ、その後を追って跳んだのである。石の落ちたところに行ったジークフリートは、それを投げたのだ。しかもその後、彼はグンテルを担って石の後を追って、女王よりも一段遠くまで跳んだのである。

かくて幅跳びはおわり、石も落ちて横たわったが、  
そこには勇士グンテルのほか、何びとの姿も見えはしなかった。

「美しいプリュンヒルトの顔は、憤懣のために紅潮した」が、勝負はついたのだ。勝者はグンテル王ではなく、実は助太刀をしたジークフリートなのではあったが。

女王は臣下の者たちに声高に言ったのだ。「おん身たちはこれからグンテル王の臣下となるのだ」。

本来これで目出度しとなるはずなのに、物語は皆がライン河畔のブルゴント国に帰還してからの出来事を更に述べて行く。プリュンヒルトは、ただの家臣に過ぎないジークフリートがグンテル王の妹と結婚するのが「身分が違いすぎる」として許せなかったのである。廷臣たちが引き揚げて、寝所の扉が閉ざされた後、彼女は言うのだ。「事の筋道がわからぬ中は、処女のままでいるつもりです」と。王は彼女の愛を戦い取るために、その着衣を掻き乱そうとしたのだが、逆に手ひどい苦痛を与えられてしまったのである。

彼女は王の手も足も共に縛りあげ、彼を一本の釘にかけて、  
壁に吊るしたのである。それは彼が妃の眠りを妨げたので、  
彼に対して愛を禁止したのであった。実際彼女の膂力のために、  
王はすんでのことに命をも失いそうになった。

ここまで女王プリュンヒルトはまさに男勝りの性格を示しているのに、この後またまたグンテル王に頼まれたジークフリートが隠れ蓑を着て激しい戦いの末に打勝つと、プリュンヒルトはまるで別人のようにおとなしくなってしまう。キリスト教に洗脳されたのか、男と共に生活するようになったためなのか、その理由は不明である。彼女は叙事詩の表舞台から静かに退場していく。

斯様に女傑たちの最後は、何故かいつも悲しいままなのである。

## 註

- (1) この話の典拠は未詳だが、「宇治拾遺物語」13の6には同じ話が掲載されている。どちらも同じ原典によるものと思われる。
- (2) 「今昔物語集」(一)。馬淵和夫、他校注。小学館。1989年。
- (3) マイケル・グラント、他「ギリシャ・ローマ神話事典」。西田実、他訳。大修館書店。1992年。

- (4) (3) と同書。
- (5) (3) と同書。
- (6) (3) と同書。
- (7) 呉茂一「ギリシャ神話」。新潮社。昭和44年。
- (8) パートン版「千夜一夜物語」1。大場正史訳。河出書房。昭和41年。
- (9) 山室静「童話とその周辺」(朝日選書159)。朝日新聞社。1980年。
- (10) リヒャルト・ワーグナー「ニーベルンゲンの指環」(ワルキューレ)。  
高橋康也、他訳。新書館。1984年。
- (11) (10) と同書。
- (12) 「ニーベルンゲンの歌」(前篇)。相良守峯訳。岩波文庫。昭和30年。  
Text: Das Nibelungenlied : Übersetzt von Felix Genzmer.  
Philipp Reclam jun. Stuttgart. 1992.
- (13) (12) と同書。